

神美民話 【奥野の川】

近年どこの川も汚れて魚もいないようになった。と言われているが、穴見川も同様に汚れて魚も少なくなったと思うがそれでも上流の奥野地区に行くと、澄んだ水がさらさらと流れてうらやましい限りである。

奥野の人家がなくなってから、約五百メートル程行った所を「ちきりが淵」と呼んでいる。今ではさほど深い淵ではないが、昭和の初め頃までは深い淵で青く水がよどんで渦を巻いていて一見して何だか恐ろしいような所であった。

ここには、幕末か明治の初めごろ、若い男女が「ちきり」を負うて遂げられぬ恋をはかなんで心中したのでこの名が起こったのだと言われている。

ちきりとは綿花を打ってその種と綿とを分離する時に使う重い道具であるが、その重いちきりを負うて心中したのである。どんな理由があったか知らぬが哀れな話である。

また同じ川の上流の奥野と丹後との境の深い谷の滝つぼに小さい二、三才の女の子がはまってなくなったことがある。

昔はだれもが山や畑に出て働かねば生活が出来なかった。若い母親は小さい女の子を家に残して山に仕事に行っていた。女の子は昼間は元気に遊んでいたが夕方になって母親が恋しくなり、以前母親について行った山の方に探しに行きあやまってこの滝つぼにはまってなくなった。

暗くなっても子供が帰ってこないので大騒動となり、村中の人々がたいまつをつけて探したら、着物も破れてひきさかれて死んでいた。また谷の口の方には赤い鼻緒の草履が片方だけ残っていたと。

奥野の川の状態はかなり変化したとはいえ澄んだ美しい水が、昔の悲劇を秘めて今も昔と変わらず岩の多い川を絶えず流れている。

若宮たけ記 「豊岡民話 耳ぶくろ（昭和 50 年発行）」より

クイズ【5】のヒント

